

生活環境と社会組織

——南スラウェシの一山村誌——

前 田 成 文*

Makassarese Social Organization in a Mountainous Habitat

Narifumi MAEDA*

This paper aims to provide a concise description of a mountain village situated in an ecotone between the Makassarese and the Buginese, in order to elucidate one type of padi-farming community in South Sulawesi. The first three sections give background information on methodology, history, and

population, focusing on adaptation to a mountainous habitat. The latter part describes modes of organization for cultivation, and concludes with the concentric categorization of life environment and the social meaning of the rice field as a symbol of continuity.

I は じ め に

I-1 本報告は、南スラウェシのマカッサル族とブギス族との転移帯(ecotone)に位置する一山村における社会組織と生活環境とを、水稻耕作に焦点をあてながら記述することを目的とする。¹⁾

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

- 1) 現地調査は1980年10月より1981年3月までインドネシアにおいて文部省科学研究費(昭和55年度海外学術調査「熱帯島嶼域における人の移動に関わる環境形成過程の総合研究」)によって行われた。調査対象となった集落には12月にチーム・メンバーと短期間訪れたのち、1981年1月より3月までの10週間単独で滞在した。小学校長でもあり村の有力者でもある R.N. 氏宅で生活し、情報収集はほとんどインドネシア語で行い、一部は R.N. 氏ほかの通訳でマカッサル語方言によった。注記がない限り、本文での表記は後者による。各戸別の世帯調査にはすべて R.N. 氏が同行し、一部インドネシア語で筆者が直接インタビューをしたほかは、大部分土地のことばが使われた。

最近の南スラウェシの研究状況については、Pelras [1978] が各研究分野ごとの簡単なサーベイを行い、1967年以降研究に従事している研究者のリストを掲げている。そのうち外国人研究者39人の中で18人が民族学者で、そのまた半分がトラジャ族研究者である。日本人では、古くは馬淵東一、最近では石川栄吉、山下晋司がいずれもトラジャ族の調査をし、佐久間徹がマカッサル族、筆者がブギス族の調査をしている。しかし、トラジャ族は別として、ブギス・マカッサル族の農村社会のモノグラフ的記述は、Chabot [1967] 以来インドネシア人学者をも含めてほとんどみられない。本報告では、このギャップを埋めるため、農村社会の全体像をできるだけ簡潔に叙述したい。記述内容の取捨選択は、もちろん収集されたデータに制限されているが、できるだけ水稻社会の一類型を明らかにするよう意図した。

I-2 調査対象となったバンティムルン (Bantimurung) は、南スラウェシ (Sulawesi Selatan) 州パンカジェネ・クプラウアン (Pangkajene-Kepulauan, 略称パンケップ Pangkep) 県バロッチ (Balocci) 郡バンティマラ (Bantimala) 村の半分を構成する。ウジュンパンダン (Ujung Pandang) 市から西海岸沿いの国道を 52km ほど北上したところにパンケップ県の県都であるパンカジェネ (Pangkajene) の町²⁾がある。この町の北1km のブンゴロ (Bungoro) という町から東へ 7 km ほどは、道路もよく平坦部である。そこから山地部に入るが、山地部の取っ掛りの集落シロロ (Siloro, 下るという意味) から山道を15km ほどさらに東へ行ったところにバンティマラ村の村役場がある。この村役場の所在地がバンティムルン部落である。乗合バスの小型が3台、大型が2台、この村とブンゴロないしはパンカジェネとを結ぶ私営交通機関として運行している。片道約2時間の行程である。

バンティマラ村の東・北・南にある隣接村はボネ (Bone), マロス (Maros) 州と境を接し、北のバール (Barru) 州境にも近い。自動車交通が普及するまでは、山間の小路がボネ、バール、マロスへ通じており、むしろ海岸部との交通よりは山間部との関係の方が深かったといわれる。ボネの邑³⁾である山間部のラムル (Lamuru), チャムバ (Camba) などとの歴史的な結びつきも指摘される。しかし、オランダ時代に海岸平野部からの山道が整備されるまでは、この地が戦争の落武者の隠れ家でもあり、かつ盗賊などの金銀財宝の埋め場所があるという伝説などからみられるように、比較的孤立した集落であったことは確かである。

- 2) 店屋がならんだにぎやかな道筋 (街) を有し、比較的家屋の密集する集落。
- 3) くに。首長のいる集落。

I-3 南スラウェシ南部の主要言語であるブギス語とマカッサル語とは、マロス県とシンジャイ (Sinjai) 県とを結ぶ線によって分けられる。しかし、マロスとシンジャイを含めて、その隣接県であるパンカジェネとブルクムバ (Bulukumba) も、ブギス語とマカッサル語との両方が用いられる。この転移帯出身者は、いずれかを母語としながら両者をよくすることでも有名である [Mattulada 1976; Mills 1975: 207]。パンケップ県の場合、地名にブギス語起源のものとマカッサル語起源のものとが入りまじっている。必ずしもブギス語地名の集落にブギス族が住んでいるわけではなく、中にはブギス語地名の集落に侵攻したマカッサル族が定着したり、その逆の場合がある。集落名に同じようなのがたくさんあるのは、地形・景観の相似による偶然以外に、移住集落で故郷の地名をそのまま用いることにもよる。調査対象のバンティムルンという地名は、マロス県にある同名の村とよく混同されるが、両者の間には歴史的な関係はない。

バンティムルンでは日常語としてはマカッサル方言が使われるが、ブギス語しか使えないブギス行商人が家々を回っても少しも不自由しないほど、住民はブギス語にも堪能である。調査対象としてバンティムルンを選んだ理由の一つは、このようなマージナルな地域にあるために、ブギス・マカッサル文化の原型を考察する上に参考となるデータを提供してくれると考えたからである。選択理由の第2は、この地域はブギス・マカッサル族以前の先住民の伝説 [Hapid 1979; Hasan 1979: 101] もあり、集落自体かなり古いということである。第3の理由は、中心となる集落がコンパクトで、戸数からいっても調査対象として適当であるという調査上の都合による。

II 立地条件と歴史的背景

II-1 パンカジェネ河流域の生態学的景観は大きく、(1)パンカジェネ河三角州を中心とし、ラグーン、砂州、河川、レヴィーからなり、エンパン (empang, 養魚池) ないし製塩田から水田へと内陸部に向かって景観の変化していく海岸低地と、(2)斜面を利用した焼畑、石灰岩凹地の湿地稻田、非石灰岩凹地の水田、ラテライト山地斜面の棚田、森林物採集をする石灰岩山林からなる山地部の二つに分類される [高谷 1982]。バンティムルンは後者の山地部に立地し、湿地稲作を核として形成されてきた集落であるが、住民は焼畑耕作、森林産物の採集と交易、鉱業、狩猟にも従事してきた山地民である。

II-2 南スラウェシの村落の原型はロンタラ (lontara)⁴⁾ にあるように、(1)水田または畑のための広い土地、(2)川となって流れる水源、(3)物の交換あるいは情報交換の中心となる市または広場の三つがそろっていなければならないという [Abu Hamid 1981: 175-176]。⁵⁾ バンティムルンの場合、水田・畑および水は現在でも豊富にあるが、村の中心 (posi butta, pocci tana) は昔は現在の中学分校の入口あたりにあってブッブルッ (bu'bulu')⁶⁾ の木があったというが、現在は残っていない。市は約 3 km ほど離れた隣部落マラカ (Malaka) の端にあるコレコレ (Colecole) で5日ごとに立つ。

バンティムルンの集落は標高 230 m ぐら

4) 貝葉。Zainal Abidin [1971], Noorduyun [1965] 参照。

5) ブギス語でそれぞれ padang lalla'na, uwae mallarinna, pasa'na である。Pasa' はインドネシア語の pasar (市) と同 pasak negeri (広場) と同解せられるという [Abu Hamid 1981: 176]。

6) モラベ (katondeng, *Vitex cofassus*) に似た木 [Cense 1979]。

いの高みの必ずしも平坦ではない丘⁷⁾ に位置し、南側は石灰岩山地とその崖壁に囲まれた凹地、北には非石灰岩の山地と崖錐が多い。集落から北および西 2 km のところにはパンカジェネ河に流入する川が流れているが、石灰岩山地を伏流する水路が雨期には方々に顕われて網の目のような流路を形成する。しかし、洪水害にまでは至らない。このような湧水地が豊富なので、この集落では井戸を掘る必要はない。また、乾期には南スラウェシの他の地域と同じく非常に乾燥するが、バンティムルンの東南 1 km のところにあるエレタッラサ (Ere Tallasa) という湧水は、たとえばパンカジェネ一帯の井戸の水が涸れてもここだけは涸れないといわれる。バンティムルンの地名には、(1)諸方面からたくさんの人が集まったところと、(2)たくさんの水あるいは洪水のあったところという二つの起源説がある。

II-3 伝承によれば、この地方で一番古い統治者は初代カラエン (Karaeng) エレタッラサ⁸⁾ で、13~14世紀のこととされる。⁹⁾ エレタッラサに根拠を置くカラエンの邑は、バンティムルン、レアンレアン (Leangleang)、パンガ (Panga)、マニャムパ (Manyampa) (図 1 参照) をもその支配下に置き、海岸部のシアンないしはラバッカ (Labakkang) やマカッサル地方のゴワとも交流があったという。この初代のカラエンが、この地方で最初の水田を開いたと言い伝えられる。

7) マカッサル地方でいう高みの地 bonto。バンティムルンでは、山ではないが周囲より高いところにある平坦地を tondong、その斜面でふつう草のはえているところを tanete、高いところにある土地に対して一番低いところにある土地ないしは石灰岩山地の間の凹地を alla', さらに丘の間の凹地で沼地を含むものを allu、盆地ではなく単に低いところを kabbung、草が平均して植わっているところを lappara、木のはえていない広い平地を parang と呼んでいる。

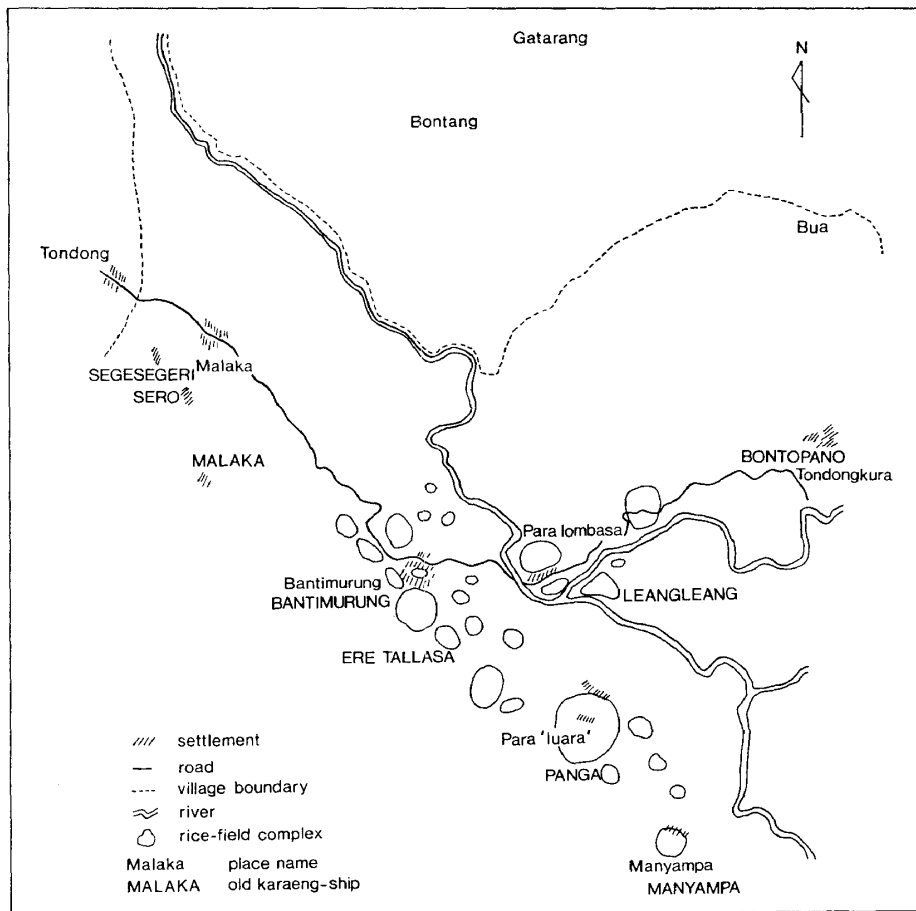


図1 バンティムルン近辺略図

16世紀に起こった事件でパンカジェネに関係のある年代には, Antonius de Payva がシアンを訪れたのが1544年, ゴワ・ボネ戦争の始まりが1562年, 商港としてマカッサルが著名になるのが1600年ごろなどがある [Hapid 1979; Rachmah *et al.* 1976]。そして, 最初のカラエンから何代目かに, この地方のカラエンもイスラームに改宗する。エレタッラサ, バンティムルンでは, 古老によれば1617年と言われているという。

カラエン・エレタ

ッラサの系統が一番古くからあるということは衆目の一致するところであるが, カラエンを称する者は上記の各集落にも存在していて, それらカラエン間の勢力関係の変遷は明らかでない。ただ, オランダがその支配を及ぼした時には, すでにバンティムルンのカラエンが上記のカラエンの中心勢力となっていたという。¹⁰⁾ オランダの直接支配は, 他の地方同様, 流動的な土着の政治制度を封建制的な固定化したものにしたようで, オランダが当時の最大勢力だったバンティムルンのカラエンをこの邑の代表と認めた以後は, カラ

- 8) 名前不詳。墓とされるところは現存しているが, 死体は埋まっていないといわれる。遺体を木に凭り掛らせて置いておいたところ, 次の日には消えてしまったという伝説をもつ。カラエンはマレー語の *raya*, ブギス語の *maraja* と同じく「大きいこと」を表わす意味から派生したもので, 広くマカッサル族 (一部にはブギス族も) の王族, 貴族, 豪族, 支配者の称号として用いられている。カラエンは, 単にたくさんある称号の一つで, 比較的広い範囲に用いられるが, 王国, 地方によって種々の称号が必ずしも画一的な意味ではなく使用されることはいうまでもない。
- 9) この年代は郷土史家によるものである。ガリゴ期 [Mattulada 1982] に集落は成立していて, ロンタラ期になってゴワ (Gowa) 王国ないしはシアン (Siang) 王国の系統のカラエンが定着し, 改めてそのカラエンの村落ないしは邑となったとするのが妥当な推測であろうか。

- 10) オランダとのブンガヤ条約は1667年11月18日を第1回とする。カラエンが各所に蟠踞している理由は, この地方がいろいろな方面から入殖してきた人々からできた証拠であるという村人もいる。

エン・バンティムルンの地位は不動のものとなったようである。¹¹⁾ この間、エレタッラサの集落はバンティムルンに併合され、カラエン・エレタッラサもバンティムルンに住むようになった。

オランダ時代には、バンティムルンのほかに、マラカ、ビラオ (Birao), ランネ (Lanne) トンドンクラ (Tondongkura) の計五つのカムポン (kampong) がバロッチ郡 (Distrikt Balocci) の下であって、バロッチ郡はパンカジェネの *controleur* の支配を受けた。¹²⁾ この行政組織は若干の変更を加えられながら、カムポンがデサ (desa) となって現在の形に受け継がれていく。そして、オランダが南スラウエシの本来の政治システムを植民地支配に利用した遺産が、パーソナルな地方分権的な土着国家から、より権威主義的な、機能的に分化した形の行政組織への移行 [Sutherland 1980: 241-242] であったように、この地方の政治形態も国家の行政機構の中に組み込まれていく。

II-4 独立戦争後、南スラウエシを席捲したカハル・ムザッカル (Kahar Muzakkar) の内乱にこの地方も1956~1957年ごろから巻き込まれ、1962年ごろにはバンティムルンや周

11) 他のカラエンの子孫もそれぞれカラエン称号を継承したが、オランダの行政組織の末端としての村長 (ketua kampong) はカラエン・バンティムルンのみで、彼だけが公式にカラエンと呼ばれ得る。

12) 五つのカンポンのうち、トンドンクラがその代表 (連絡係) としてスレウェタン (sullewetang) に任命された。なお、17世紀よりマカッサル地方を治めた VOC にとって、バロッチはラバッカン、ブンゴロ、セゲリ (Segeri), マンダッレ (Mandalle) とともに Noordedistrikten の一つであり、1854年からは Onderafdeling Pangkajene の下の Adatgemenschap となる。日本軍政時代はマカッサル市のパンカジェネ郡と呼ばれる。パンケップがマカッサルから分離して県として独立したのは1959年である [Masiga *et al.* 1974]。

辺の集落はほとんど全部焼き払われて、山に入ってゲリラに参加する者、パンカジェネに逃げて政府軍の保護を受けるものと、家族の中でもバラバラになったケースも多い。内乱が終息に近づき、分散していた人々が元の集落に戻ってきて家を建て始めるのが1964年ぐらいで、現在建っている80数戸の家の多くは1967年以後に建てられたものか、それを改築したものである。

1965年12月に新体制村 (Desa Gaya Baru) として、それまで独立していたバンティムルンとマラカとを併合してバンティマラ村ができた。1975年にはさらに、この村とトンドンクラ村とを合併してトンドンタッラサ (Tondong Tallasa) 村ができた。しかし、これはまもなくして1979年には再び元のバンティマラ村とトンドンクラ村とに分離して現在に至っている。

III 人 口

III-1 南スラウエシ州の州域は 85,088.72 km², 人口は5,722,501人で、23の県および市域にわかれ、169の郡 (kecamatan), そしてその下に1,170の村を含む。パンケップ県は、その中でも小さい方に属し、面積 889.74 km², 人口206,322人 (州人口の3.6%) で、9郡からなり、その下に70の村、さらに部落が265ある。パンケップ県の114からなる島嶼部は三つの郡にわかれ、面積 118.85 km², 海岸平野・内陸部はパンカジェネ、ブンゴロ、ラバッカン、マッラン (Ma'rang), セゲリ・マンダッレ、バロッチの6郡にわかれ、面積は770.89 km² である [Kantor Sensus 1979; Masiga *et al.* 1974]。

バロッチ郡はパンケップ県の最東南端の山地部に位置し、七つの村からなるが、便宜上、南バロッチと北バロッチとにわけられる。南バロッチ4村は郡都の周辺にあり、パンカジ

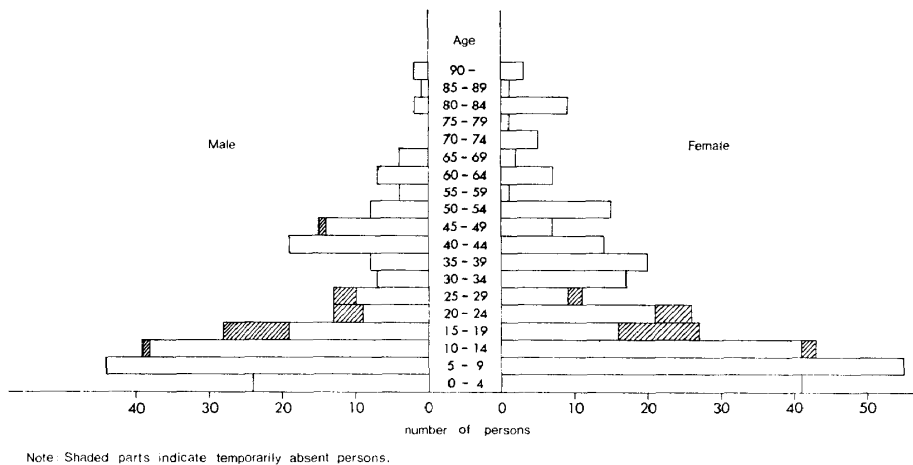


図2 バンティムルン人口構成

エネ南のトナサ (Tonasa) から東行したところにある。郡長 (camat) が北バロッチの3村を訪問する時には、いったんパンカジェネに出て改めてブンゴロから東行する。郡の面積は郡役所によると 60,000 ha といひ、人口は 19,458 人 (男 9,579, 女 9,879) で世帯主数 3,527 (平均 1 世帯 5.52 人) である。

III-2 バンティマラ村の面積は 92 km² で人口は 1,921 人 (男 947, 女 974) (表 1 参照) である。¹³⁾ オランダ時代にはマラカとバンティムルンの二つの邑にわかれて、それぞれカラエンがいたので、現在でもカムボン・マラカ、カムボン・バンティムルンと通称されるが、正式にはこのカムボンがなくなって、RK が村の下部行政単位である。RK ごとの人口は表 1 の通りである。各 RK はさらに 2～3 の RT (Rukun Tetangga) に分けられる。バンティムルンの中心である RK III の三つの RT の人口は表 2 にみられる。本調査で世帯インタビューを行なったのは、これら

13) この数字は村役場で 1980 年 11 月現在ルクン・カムボン (Rukun Kampung, RK と略称) の報告を積算したものである。1980 年 10 月に実施された全国センサスでは、その時点で村に不在の者を含めていないので、人口 1,768 (男 849, 女 919) となっている。

行政区分とは一致しないバンティムルンの核集落 77 戸、人口 544 人 (図 2, 3 参照) と東側の水田を隔てたところに散在するティファ (Tihua) の 5 戸、人口 18 人である。強いていえば、RT VI と RT VII とにほぼ対応するが、他の RT の境界近くに住んでいる世

帯を含んでいない。¹⁴⁾

バンティマラ村には、小学校としてバンテ

表 1 バンティマラ村人口 (1980 年 11 月現在)

		男	女	計	集 落
Malaka	RK I	238	275	513	Malaka, Lompo' Ulu
	RK II	125	99	224	Sero, Colecole
Bantimurung	RK III	386	381	767	Bantimurung, Paralombasa, Ere Tallasa
	RK IV	198	219	417	Para'luara', Manyampa
	計	947	974	1,921	

注 Kantor Desa Bantimala による

表 2 バンティマラ村 RK III の RT 別人口 (1980 年 11 月現在)

	男	女	計	集 落
RT VI	141	143	284	Bantimurung の一部, Ere Tallasa
RT VII	139	128	267	Bantimurung の残り
RT VIII	106	110	216	Paralombasa
計	386	381	767	

注 Kantor Desa Bantimala による

14) RT VI と RT VII との村役場での人口は 551 人。筆者のインタビューによる調査人口は、一時不在者あるいは不定期在村者を除くと 523 人で、それらを含めると 562 人である (表 3 参照)。

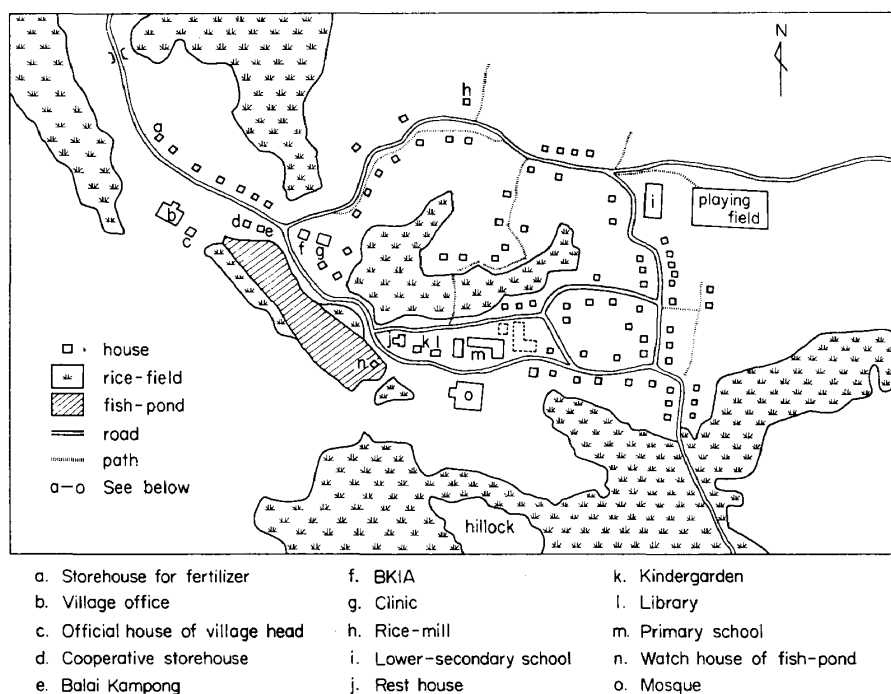


図3 バンティムルン集落略図

表3 年齢別バンティムルン(含ティファ)人口

年 齢	男	女	計
0 - 4	25	42	67
5 - 9	44	55	99
10 - 14	40 (1)	43 (2)	83 (3)
15 - 19	19 (9)	17(11)	36(20)
20 - 24	11 (5)	23 (5)	34(10)
25 - 29	12 (3)	10 (2)	22 (5)
30 - 34	7	18	25
35 - 39	8	21	29
40 - 44	20	14	34
45 - 49	14 (1)	7	21 (1)
50 - 54	8	15	23
55 - 59	4	2	6
60 - 64	7	7	14
65 - 69	4	2	6
70 - 74	0	5	5
75 - 79	0	1	1
80 - 84	2	9	11
85 - 89	1	1	2
90 -	2	3	5
計	228(19)	295(20)	523(39)

注 () 内の数字は一時的不在者数

イムルン(6年制), マラカ(6年制), パラッアラッ(Para'-luara')(3年制)の3校があり, バンティムルンには中学校分校が1校ある。すでに小学校就学前から水汲みなどの家事手伝い, 牛・水牛の放牧管理, 田仕事の補助などにその労働力が期待されているので, 就学が2~3年遅れたり, 3年生ないし5年生を終えて退学したりする例も多い。一般に, 農繁

期には欠席児童が非常に増加する。¹⁵⁾ 反面, 中等教育, 高等教育への志向も強く, 高校(パンカジェネ, ウジュンパンダン), 大学(ウジュンパンダン)にもかなり入学しているが, これら高校生, 大学生はもはや日常的な労働力としては期待されない。表3で()内数として示した数字には, そのような他地での就学生徒・学生と, 独自でパンカジェネなどの比較的近くで就労し, 定期的に週ごとあるいは月ごとに帰ってくる者とを含む。¹⁶⁾

出生地別に人口をみると, 約86%がバンティムルン生まれで, 4%がその他の村内の集落, 同じく4%が周辺山地部, 1.5%がパンケップの海岸部生まれである。残りは, ウジュンパンダンおよび島嶼部生まれ(0.7%)と不明(2.3%)を除くと, ボネ, ママサ(Mamasa), タートル(Tator), ポルマス(Polmas), タカラル(Takalar)から単身または家族連

15) 1979年以前には農繁期に休日が設定できた。

16) 45-49歳グループの1ケースはバロッチに居住する多妻婚者である。

れで公務のため村に滞在している人たちである。

一方、出稼ぎ経験のある在村者はわずかに男8人を数えるのみである。ラバukkan (8年滞在)、パンカジェネ(5年と数年)などの近接地のほかに、マッピリ (Mappili, 7年)、カリマンタン (Kalimantan, 1年, 4年)、イリアンジャヤ (Irian Jaya, 3年)、アムボン (Ambon, 3カ月)に出稼ぎに行っている。これらのほとんどの場合、行く先に親族ないしは同村者、知人がいる。農業、商売の手伝い、林業ないしは石油工業の労働に従事している。出稼ぎに行ったきり帰村しない者もあるが、実数は不明としかいいようがない。¹⁷⁾ ただ、上掲の表で内数として示された一時不在者、とくに高等教育を受けた者は、そのまま村との関係を薄くして完全な出稼ぎ離村者となる可能性が大きい。

III-3 村内婚は規範としてはないが、イトコ婚は選好される。南スラウェシの中でも、地域・階層によっては第1イトコ婚が好まれる場合もあるが、バンティムルンではむしろ第1イトコ婚は忌避 (pemmali) され、第2イトコ婚が好まれるという。バンティムルンの84組の夫婦¹⁸⁾とふたりの第2妻とについて現在の夫婦関係のみをみてみると、第1イトコ婚6、第1イトコの娘または親の第1イトコとの婚姻4、第2イトコ婚24、第2イトコの娘または親の第2イトコとの婚姻6を数える。第2イトコ婚は全体の28%をしめ頻度が最も多いが、第1イトコ婚、異世代間の近親

17) 出稼ぎ経験者が少ないのに対し、親族の中で出稼ぎ中のものが多いのは、人が還流せずに放出の傾向にあるせいだ。なお、集落ごとにみると、例えば水田の少ないパラッアラッでは出稼ぎが多い。水田を売って出るケースもある。単身出稼ぎの中には教育のドロップ・アウト者が多いことを学校の先生は指摘する。

18) 診療所の看護婦と女教員とのふたりを除く。

表4 婚姻・離婚・再婚 (rojo) の件数
(バンティマラ村)

年 度	婚 姻	離 婚	rojo
1975	25	-	-
1976	22	3	-
1977	33	-	-
1978	20	2	-
1979	26	1	-
1980	17	2	-
計	143	8	0

婚もみられる。そのほか、第3イトコ、第4イトコとの婚姻以外で、遠縁の親族との婚姻は9ケース、まったくの他人は3ケースにすぎない。

イトコ婚は血の純粋を保持するものとして、同じ身分の者と結婚するための階級内婚の一手段とも解し得る (後述 V-2 参照)。そのため、集落ごとの地理的な孤立度¹⁹⁾が高いにもかかわらず、通婚圏が1集落に集中せずかなりの拡がりをみせる。

生別離婚は村役場での統計によると必ずしも多くない (表4)。バンティムルンの婚姻経験者全員の解消された婚姻について離別と死別とを比較してみると、43ケース対25ケースである。これからみると、近親婚が多いが故に生別離婚が極端に少ないとは考えられない (前田 [1973] 参照)。

III-4 村の人口の動態については資料が少ない。1975年の村役場の統計では男896人、女928人、計1,824人である。²⁰⁾ 表1に掲げた1980年の人口1,921人と比べて97人の増加である。小学校の児童数は1965年より毎年記録が残されていて、1965年207人であったのが1980年

19) 例えば、バンティムルンと隣部落マラカは2~3 km しか離れていないが、話し方ですぐに分別されるという。

20) 1971年のセンサスの資料は村役場では手に入らなかった。

には505人と増加しているのは明らかであるが、就学率が不明であるので人口推定にはあまり役に立たない。

ある老齡者の記憶によると、1911年には7戸がバンティムルンにあり、1戸には5～6組の夫婦が住んでいたという。他のインフォーマントによると、60～80年前には9戸あって、それぞれ家に名前がついており、一番大きい家で7夫婦住んでいたという。同じインフォーマントは、1900年前後にはカラエン・エレタッラサの家、カラエン・バンティムルンの家、そのイトコの家、3軒しかなかったという。そのころの家(bola)は現在の長方形の窓ではなく、丸形窓で家の中は暗く、多くの部屋(bili)にわかれて、大家族が共住していた。²¹⁾このような家は1940年代には20戸に増え、その後も徐々に増加していったという。²²⁾それでも1950年代までは現在のバンティムルンの集落(図3)の南半分側のみ家があり、北半分は森林であったという。既述したように、1950年代の後半から60年代初めにかけて内乱のために家々が焼き払われ、その後に建った家は最初は小屋のような家であったが、1964～1965年以降現在建っているようながっちりした、しかし、往時の家よりはずっと小さい形の家が建ち始めたわけである。現在2夫婦が同居しているのは、外来の一時定住者を除いた80戸のうち、わずかに13戸を数えるにすぎない。残りは1夫婦を中心とする世帯である。

21) 19世紀半ばにボネのチェンラナ(Cenrana)河からテムペ(Tempe)湖周辺のブギス族を訪れたBrookeも「各家には15人」[Mundy 1848 I: 93, 96]住んでいたと報告している。

22) これらの家の数はバンティムルンの中心となる核地域にある家のことで、これらの家に属しながら出小屋(bolabola)で生活していた者がいたと推測される。

IV 水田・畑・森林

IV-1 この地方では11月ごろから雨が降り出し、12, 1, 2月と毎月300 mm以上の雨が降る。とくに1月は連日のように1日中雨が降り続くことがある。3, 4月と雨量が若干減って、5月ごろにまた雨が多くなる。6～8月から10月は乾期となり、全体的に水不足となり、非常に暑く過ごしにくい季節でもある。

水稻作りは12月から始め、最終的な米の収穫は6月である。現在は多くは3カ月米(IV-2-v)で、昔は5カ月米であったが、植付始期はほぼ同じであった。陸稲は同様に12月に種蒔きをするが、トウモロコシと混作して10月に種蒔きをすることもある。トウモロコシは7月から10月と、10月から1月の2期がある。キャッサバ、バナナは大体11月に植える。これらの作物は古くから栽培されているものである。

ダイズは1940年ごろにオランダが導入したことがあるが普及せず、やっと1966年ごろから商品作物として広く作られるようになった。畑地で作るのは、2, 3月播種、5, 6月収穫である。次に、収穫されたものを種にして、水の得られる水田で裏作を行う。食用として一部を自家消費しだしたのもごく最近である。そのほか、イモ類、ラッカセイ、リョクトウも植える。屋敷地の畑では畝立てをしてササゲ、ナスビ、バナナ、パパイヤ、カンキツ類、トウガラシ、ココヤシ、コーヒーなどを植える。バンティムルンの集落内ではキャッサバをほとんど植えていないが、周辺の集落の屋敷地にはキャッサバが多い。屋敷地、水田区画、畑には家畜、野獣の侵入を防ぐために必ず垣根が設けられる。

乾期には籐や木材の伐採に従事したり、アレン糖の製造に精を出したりするのが昔のパターンであるが、畑・水田の整備がすすみ、

全体に人手不足となってきた現在では、少なくとも中心の集落ではこれらにほとんど目を向けなくなっている。

IV-2-i 南スラウェシ全体の水田面積は 597,752 ha [Kantor Sensus 1979] で、パンケップ県は約 21,000 ha のみで比較的水田の少ない県に属する。²³⁾ パンケップ県の中でも山地部をしめるバロッチ郡は海岸部に比べて小規模の水田団地 (lombo') が点々とあるだけで、水田面積はわずかに 1,750 ha といわれる。²⁴⁾ バンティマラ村では登記されている水田が 298 ha で、そのうち、かんがい水田は 150 ha である。²⁵⁾ 登記していないものも含めた面積は村長 (kepala desa) によると 400 ha 以上である。このうち旧バンティムルン部落に属するのは約 290 ha、旧マラカ部落に属するもの 113 ha である。

IV-2-ii 水田の一区画をロムボツといい、人の名前、地理的特徴、土地名などをそのあとにつけて呼ぶ。いわば水田団地のようなもので、オランダの地租徴収の単位でもある。多くはある時期に一度に開田された。ロムボツのなかで各水田ごとにガルン (galung) 云々という名前がつけられることも多い。土地台帳 (Buku Rinci')²⁶⁾ 上では旧バンティムルン部落の登記された土地区画は86を数え、

23) 県庁の1980年の統計。ただし、統計局の数では1978年の水田面積は 22,495 ha である [Kantor Sensus 1979]。このうちかんがいの水が得られるのは 5,000 ha、そのうち裏作を行なっているもの 3,500 ha である。現在タバタボ (Tabotabo) にかんがい施設を工事中で、これが完成すると、かんがい面積は 8,000~11,000 ha になる。また、新たに 2,000 ha の開田を予定している。

24) バロッチ郡役所の1980年1月10日現在の統計による。

25) バンティマラ村役場の1980年の統計である。

26) Rinci' の語源については明らかでないが、オランダ時代に測量された土地台帳。現在政府は再測量して土地証書を発行しつつあるが、調査対象村にまでは及んでいない。

そのほとんどにロムボツ云々という名が記載されている。²⁷⁾ 村人は土地台帳上の名をそのまま使うこともあるが、同じ区画でも開田時期の違い、水懸りの違いなどをもとにさらに細分して呼んだり、別の通称を用いる場合もある。土地台帳に対応して、個人に与えられる証明書は sure' kebo (白書)、譲渡抵当された場合には sure' gau' (青書) といわれる。これらの書類と実情とを考慮して、村役人、有力者が人頭税 (Pareja, 17才以上有収入者あたり 2,000 Rp) と地方開発税 (Ipeda, 1 ha あたり 2,000 Rp) の額を毎年査定する。

バンティムルンでは、一時的に外から来ている居住者を除くと、水田を所有していないのはわずかに4戸 (全数78戸) である。非常に荒っぽい計算であるが、1戸平均9筆所有している。²⁸⁾

IV-2-iii バロッチ郡長によれば、この10~15年間に約 600 ha の新田が開かれたという。バンティマラ村長は同村での新田増加を年約 3 ha と推定する。そのほとんどはマラカ地域の棚田を中心としたもので、最近のバンティムルンではほとんど新田の増加がないという (VI-2)。²⁹⁾ バンティムルンで棚田の拡張に熱

27) Salinan boekoe rintjik Kampoen Bantimoe-roeng no. 165, Adatgemeinschaft Balottji, Onderafdeeling Pangkajene, Afdeeling Makassar. 1930年代に写されたもの。この村でいわゆる sima (徴税) が導入されたのは1900年前後であるとの古老の話である。ロムボツ名、区画番号、シリーズ番号、所有者名、筆数、譲渡の有無、各所有者ごとの面積が記載されている。ボネの土地制度について Samin *et al.* [n.d.], マカッサルについて Mangarandang [1978] など参照。

28) 平均水田所有面積はボネ県で 0.9 ha、ブルクムバ県で 0.7 ha、シンジャイ県で 0.5 ha という (1981年末の Operasi Lappo Ase という食糧増産運動に關しての農業副大臣の発言の新聞報道による)。マカッサルのボントラムバ (Bontoramba) では平均水田所有面積 0.54 ha (1949年) と報告されている [Chabot 1950: 41]。

29) トンドンクラ村では年5 ha ぐらいの新田拡張が行われているという (同村長による)。

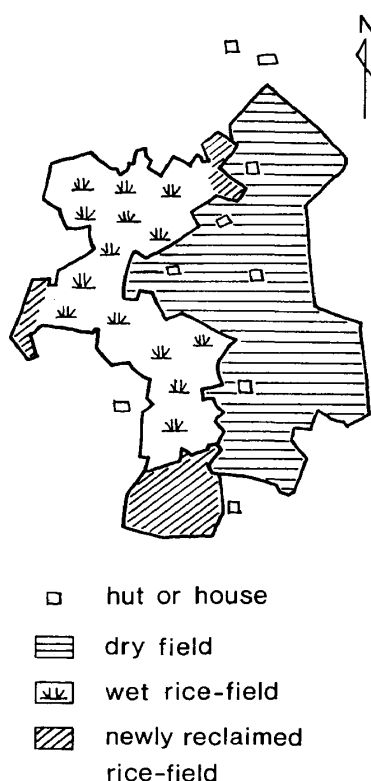


図4 ティファの水田と畑

心ではないのは、水田に転化し得る比較的に平坦な畑がまだ豊富にあるからだという。石灰岩山の凹地に水田の多くがかたまっていることも、その理由の一つであろう。インタビューの結果では、1970年代に16世帯が47筆の水田を造成している。³⁰⁾

新しい水田の開き方を村人は次のように説明する。まず移動畑から常畑になると、相続などで分配するために境界として畦を作る。すると、場所によっては湛水状態になる。陸稲として作っている稲は水を好まないの、で、水稻を植えることになる。それから本格的な水田として維持されていく。

実際には、水田団地の周辺部を徐々に水田(ana' galung)化していくこともある。この場合もティファの例(図4)のように水田と常畑とが隣接していて、畑から水田へという

パターンがたどられる。同様に家の裏などの水田も、元は畑であったという例は多い。また、昔水田として使われていたところで、水懸りがうまくいかないので放置されていたり、³¹⁾あるいは所有者が内乱期に行方不明となり、他人が畑として使っているようなところもある。

ロムポッダムパン(Lompo' Dampang)は、バンティムルンの集落のすぐ南西に広がる約13 haの水田団地の中でも最も古い水田とされているカラエンの水田であったところである。このロムポッの南1 kmにあるロムポッソデ(Lompo' Sode)の場合は、1943年に当時のカラエン・バンティムルンが村民を動員してソデ川の東岸に2 haの土地を開いた(bakka)。周囲は切り立った石灰岩の岩山である。最初は陸稲とトウモロコシが主として植えられていた。畦も設けられていたという。水稻を植え出したのは1947年～1949年ごろからであるという。ソデ川の水源はさらに1 km弱南に行ったところの湧水である。湧水わきにはパレッベアン(Pare'beang)と呼ばれる畑があるが、ここには湧水から水はひかれていない。

ロムポッソデとロムポッダムパンの間に、ガルンパッボラアン(Galung Pa'bolaang)がある。ここも切り立った石灰岩の山の壁に囲まれたところで、ソデ川の西側はアレンの古い木がならぶ畑であり、東側は3筆ほどの水田である。昔ここに集落があったといわれるように、開拓は古く、1920年ごろ畑として開かれたのだともいわれる。もともとはカラエン・バンティムルンがカラエン・エレッタッサに与えた土地である。内乱後放置されて叢林になっていたが、1975年に政府の補助でセメント製の堰が作られてから、不完全ではあるが一応川の東側に水が来るようになった。

30) 本インタビューでは時間的制約もあって所有筆数による聞き取りしか行わなかった。

31) Ku'lang (休耕田)、または kombang (叢林になった休耕田)。

それを利用して、カラエン・エレタッラサの息子のひとりが1977年に水稻を試み、最初の年は失敗したが、それ以後何とか続けて作っている。この場合は自分の家族だけの労働力で水田化し、最初の年から水稻である。

土地台帳にある水田は現在も水田として利用されており、畑として登録されている土地も、集落になったのを除いて、水田化している。しかし、土地台帳作成時よりももっと古いという水田、例えばロムポッエレタッラサの一部が必ずしも登記されていない。土地台帳と現在の水田団地との対照、聞き取りから、水田拡張には(1)内乱終息後焼畑禁止が厳しくなった1970年代、(2)日本軍占領期とその直後、(3)1920～1930年代以降の陸稲から水稻卓越の時期(IV-3-ii 参照)の3時期があったことが推定される。³²⁾

IV-2-iv 比較的潤沢に水があるとはいえ、雨期には稲苗が流されたり水没したりしないように、乾期には飲料水を確保することに腐心する。バンティムルン集落にはロムポッドムパンの東のロムポッカレハ(Lompo' Kareha)の奥の水源から鉄パイプの導水管がひかれている。これは日本軍政時代にこの部落に住んだ日本人が作ったものであるという。昔からの導水樋としては竹またはアレンヤシの幹を使ったサルッ(salu')があり、谷水を流したり、かんがい水を離れたところへ送るために用いられる。

水田より高位のところで自然流水を塞ぎ止めて水が入ってくるようにし、あとは田越して水位を調節する工夫は、水田を作る前にまず農民が考えることであるという。現在そのような古い堰は政府の補助でセメント製のものにかわり、かんがい水路も整備されつつ

ある。この堰の維持管理は、改修などの費用の捻出などをも含めて村長の責任とされ、村民相互の間に維持組織はない。昔はカラエンないしは開田者が、強制労働または共同作業でしていたといわれる。

IV-2-v 稲の品種は農業普及員の推定によると、1981年作付ではブラントス(Berantas)、チタルン(Citarung)、IR42などの新品種が75%に及んでいるという。³³⁾ もっともこれには1960年代のIR5の系統のプリタ(Pelita)なども含まれている。伝統種といっても、パダッエロ(Pada'ero, 7カ月稲、深水に耐え2m近くにもなる。収量がよいといわれる)は1975年ごろにここに入ってきて、ダイズの裏作ができないところだけに植えられており、シンタ(Sinta)、ガディス(Gadis)というのも1950年代から栽培されるようになった。結局、この地方での昔からの品種はラパン(Lapang, あるいはSiga)、バック(Bakka)、バンダ(Banda)の粳米と各種の糯米であろうか。

作期の長い伝統種と短い新品種とを同じ水田団地に植えると、熟期の違いが出てねずみ害が多くなるので、新品種導入の場合は農業普及員の指導で村として試験的に行う水田団地を協議して決定し、全員がそれに従うようにする。³⁴⁾ 1981年にはバンティムルン集落の南の水田団地にブラントスが作られた。これはこの団地が最も水懸りがよいので、早く収穫して裏作を行おうということと、この団地の田植え時期が一番遅いということ〔高谷

32) 現在90歳といわれるティファに住む老人は、父親が水田をもっていない時に生まれたのでPa'dare(畑作人)と名づけられ、その弟は父が水田を作ってから生まれたのでPamali(maliはgalung水田と同じ)となったという。

33) パンケップ県での農業普及局の県内における雨期作率75%、乾期作率100%という数字と一致する。

34) 新品種導入に際しての問題は、水と労働力不足と収穫後の処理(新品種の場合も穂摘み)である。肥料は60%ぐらいが使っているという。水田が石灰岩凹地に分散していて各水田団地間の通行が困難であるという立地条件からいって、個人による機械化は難しい。病虫害はあまり問題とはなっていないが、噴霧器3台が購入されている。

表5 世帯員数別稲収量

世帯員数	basse'	0	49	50 99	100 149	150 199	200 249	250 299	300 349	350 399	400 449	計
2	1	2		1								4
3	1	2	1									4
4			1	1	1						1	5
5		3	4	3		1	1	1				13
6			5	4	3	2						14
7	1		2	3	1	5				1		13
8		2	1		2	3	3					11
9		1	1	1		1					1	5
10				3		1		1			1	6
11			1			1						2
計	3	10	16	16	7	15	4	2	1	3		77

1982] と関係がある。

IV-2-vi 水稻の2期作は行われていない。現在裏作 (pabu'bulang) にダイズが急速に普及している。ロムボッダムパン付近とパラッアラッの一部のかんがい水の豊富なところで行われ、棚田では植え付けられていない。³⁵⁾ ダムパンではダイズのあとにトウモロコシが植ええられる。

ダイズが普及する前にはゴマを植えていたという。トウモロコシなどは昔は畑のみで栽培していたが、1950年以降焼畑が禁止されて畑の絶対量が少なくなるにつれ、水田でも水稻の田植え前に収穫する形で導入されたという。

IV-2-vii 世帯別聞取りによる1980年度の米の収穫量を総計すると、10,313束 (バッセ, basse') となる。不明を除いた調査戸数77で割ると1世帯あたり約134束である。この地方での1バッセあたり粳米 7~10 lit.³⁶⁾ の換算

35) 隣部落のマラカではダイズに適した耕地がないので、バンティムルンの耕地を借りて植え付けている。

36) 同じ1バッセでもパラッアラッは7lit., ダムパン (Dampang) では10lit. と場所によって異なる。

率を適用すると約1,140 lit., 即ち約760 kg となる (表5)。1日1世帯1~3 lit. の米を消費するといふが、これはトウモロコシ、キャッサバなどの代用食もあり、1年中毎日3度米を食べるわけではないから、自家消費量以上の米を産出していることになる。³⁷⁾

米の平均収量は、R.N. 氏の評価によると、比較的収量のよいロムボッダムパンで1ha あたり220バッセ取れるという。粳米約1.5 ton である。農業普及員によると、伝統種で粳にして約2~4 ton, 新品種 (チタルン) では8ton ぐ

らいに達するという。

ダイズを裏作として水田に作っている世帯は64世帯ある。その全世帯の聞取り収量の総計は199.65ピクル (pikulu', 3,986 lit. にあたる) で、1世帯平均3.12ピクルである。1980年の相場では1 lit. あたり170 Rp で買い付けられたという。

IV-3-i 焼畑移動耕作は政府の強い指導もあって現在影をひそめている。周辺の山々はこの10年ぐらい再植の努力が政府によって続けられているが、非石灰岩地帯の多くは禿山で、わずかに草や叢木が茂っている。

1965年ごろまでは焼畑耕作 (ma'koko) がふつうにみられたというが、その作期は次の

37) 昔は陸稲が平野部へ売られていたという。水稻も昔は収穫前に売られることが多く、家では陸稲、トウモロコシを常食していたという。現在どれくらい売却されるのかは不明であるが、学費、祭りの費用など不時の出費の際に少しずつ売るパターンが多い。ちなみに天井裏の米置き場 (pamakkang) にはふつう500 lit. 収容可能であるという。なお、Pelras [1974: 357] は1日成人1/2 lit. として、成人ふたり、子供4人の家族で年間消費量を1,100 lit. あるいは900 kg (1 lit.=0.82 kg) としている。

ようである。まず、8月ごろに一つの部落単位で森を切り開き、焼いた跡を片づけて柵を作る。雨が降り始める10月ごろにトウモロコシを播く。男が棒で穴をあけ (mattoja'), そのあとから女が穴に種を入れて (mangase') いく。トウモロコシが穂を出すころ (11月) に、陸稲をその間に播く。梗より糯が多い。そして、周辺にバナナを植えた状態になると bela' (畑, インドネシア語の ladang) と呼ばれる。2年目もトウモロコシと陸稲を同様に植えるが、畑は tattakkang (繰返しの意) と呼ばれる。3年目は allete' pakkokoang といい、ほかの場所に移る。

焼畑耕作には水稻耕作の時のような儀礼 (下記 V-5) がなく、祭司 (ピナティ, pinati) もいない。一説によれば, ma'koko と呼ばれる焼畑耕作は昔は平民 (tau biasa) だけがしたもので、彼らは中心集落には住まず焼畑の中で小屋 (bolabola koko) に住んで点々と住居をかえていったという。現在でも水田を所有する貴族の血統の者は集落に住み、畑をしているとしても一時的に出小屋に住むだけである。多くの畑作地常住者は貴族の称号をもっていない。

IV-3-ii 1981年に畑作を全然しない世帯数は78世帯中19ケースあった。いずれも人手不足をその理由にあげる。³⁸⁾ そのうち実際に男手がないのは6ケース、病気1ケース、老齢2ケースである。そのほかは男手はあるが、教員をしているのが4ケース、バス運転手1ケース、村役人2ケース、専農3ケースであ

る。これらのうち、最後の3ケースを含めて9ケースは生活に十分な水田を占有しており、畑仕事をしないでもよい。1例を除いて貴族の血統である。ただし、水田をたくさん占有していて畑作をしない者たちの水田の多くが、ダイズの裏作のできるよい水田であることは注意すべきである。そのような水田はカラエンなどの有力者が開いたところで、貴族の子孫によって現在占有されているわけである。

IV-3-iii 畑は占有者がいなければ自由に使ってよいというのが原則である。占有している証拠としては、垣あるいは土盛り、畦 (tingkasa') があるか、昔そこを開いて耕作したという印にココヤシ、アレンヤシ、チーク、バナナなどの lamung attaug といわれる永年生有用植物があればよい。このような印が残っているところは占有者の許可がなければ使用できない。

インタビューによれば耕作面積は 1/2 ha から 2 ha ぐらいが多数をしめ、畑作世帯58戸の平均は1 ha 強である。³⁹⁾ 全面積は約 62 ha ということになる。水田と異なり、畑の場合は通常1カ所にまとめて畑をもっており、数カ所で同時に畑作をするということはない。常畑として継続して毎年耕作している期間は、1～4年が21ケース、5～9年が9ケース、10年以上が26ケース、不明が2ケースである。最高は40年間耕作しているという回答があった。

IV-3-iv トウモロコシは自家消費ないしは無償の分配にあててを原則とする。1980年度にトウモロコシを収穫した世帯は全世帯の70%に達している。そのうち2/3の世帯は10～20束 (1束は200本) の収量を得ている。ダイズを畑に作った世帯は31世帯で、世帯あたりの平均量は水田裏作の場合より低い2.75

38) ただし、その中には水田裏作はしているケースはある。なお、バンティムルンの住民で中心集落に住んでいない世帯は、ティファ8戸、ラブラン (Labulang) 2戸、ロシタン (Lositang) 1戸、デラ (Dela) 3戸、アリシ (Alisi) 1戸である。そのうちデラ1戸、アリシ1戸とティファの3戸とはバンティムルンにも家をもっているため、インタビューの中に入っている。ティファの残りの5戸に対してもインタビューが行われた。

39) ポントラムバで1949年に1世帯あたり平均0.69 ha の畑を所有している [Chabot 1950: 41]。

ピクルである。土地によってはトウモロコシ、ダイズだけを植えているところもあるが、多くはバナナ、キャッサバ、竹、リョクトウ、サツマイモ、パパイヤ、カボチャ、ジャックフルーツ、ミカン、コーヒー、キャシュナット、ココヤシ、アレンヤシ、マンゴなどの果樹、チークなどを適宜選択して植えている。果樹、ヤシ、木があるところは古い開墾地である。

陸稲と水稲とでは、水稲の方が労働力がより多く必要とされ、1900年の初めごろはまだ陸稲の生産量の方が水稲のそれより多かったという。しかし、1940年代にはすでに水稲の方が卓越し、以後陸稲はだんだん減っていき、ダイズが普及し出してからほとんど作られなくなった。1980年に陸稲を植え付けた世帯は3ケースのみである。

IV-3-v アレンヤシを畑、集落の近くに植え、アレン糖を製造することが少し前までは盛んであった。⁴⁰⁾ 1950年代まではバンティムルンの集落内にも三つの砂糖作り場があり、アレンヤシもたくさんあったという。しかし、内乱の食糧難の時に、多くのアレンヤシを切り倒してデンプン (tawaro) を取ることが行われ、集落近辺ではほとんどアレンヤシをみかけない。従って砂糖作りもなくなり、現在は山奥のアリシなどで作られるのを購入する。パンガ周辺では、昔は水田より砂糖作りに力を入れていたが、徐々に水稲耕作に比重が移っていき、最近ではダイズ作りの普及に伴って砂糖作りは行われなくなった。

IV-4 バンティムルンの森林産物は藤と木材とアレンヤシの繊維で作った綱であったという。木材としては、鉄木と同等の質であるというサッパ (sappa) や、フタバガキ科の木 (keri, *Dipterocarpaceae*) やモラベなどはこの

地の特産であった。昔はこれらの樹木は、カラエンの許可がなければ外部の者は伐採できなかった。

サゴヤシは集落の湿地部にみられるが、現在はデンプンを食することなく、葉、葉柄を利用するのみである。猿、猪は、畑・水田の害敵として数は多いが、食物とならないので捕獲されない。鹿狩り (pakanraja tanrukang) は昔の貴族のスポーツとして盛んであったが、現在は行われない。

山地に住む人の常として山からの産物を日常生活に利用することは多かったであろうし、いまでも気がつかないようなところで山の産物を利用してはいるが、現在では森林生産物の採集に中心集落の住民はほとんど従事しないといってよい。ただ、大工の仕事に不定期的に従事する人は多く、この人たちは大のこ、なたなどで随時木材を調達する。

V 社会組織

本章では農耕に際しての人的動員に関連する社会組織の側面を中心として取りあげる。概略的に、親族組織 (V-1)、伝統的身分制度 (V-2)、リーダーシップ (V-3) を述べ、農業労働の組織 (V-4) と農耕サイクルと儀礼 (V-5) について考察を加える。

V-1 イトコ婚と世帯員数とについてはIII-3, III-4 でふれた。この節では親族組織について若干補説したい。

V-1-i Chabot [1950: 17; 1967: 192] はその調査地ボントラムバにおいて数個の双系的内婚親族集団を指摘しているが、バンティムルンではこのような分類をすることは難しい。このことは、前者がはっきりとした外来者グループを含んだ異質的な構成であるのに対し、後者が比較的同質的であるという違いだけではなく、そのような親族関係以外の決定

40) カラエンは10個の砂糖生産ごとに1個の砂糖を徴収したという。

要因がないとグループわけが難しいという、親族「集団」の特質に関わってくる問題である。⁴¹⁾

バンティムルンでは夫婦とその子供だけを指す単位はない。⁴²⁾ 夫婦は *sikalabine*⁴³⁾ と呼ばれる。Sibola は一つの家に住んでいる者である。同様に世帯員を指すが、それに「世話をみなければならぬ範囲の者」という意味が加わると *repo'* となる。村人によれば、この単位が最も小さい家族（インドネシア語 *keluarga*）の単位であるという。この中には同居している召使のような使用人 (*toribola*) も含む。いわゆる家族ないし親族を指すのは *sipammanakang* (あるいは *sibija*) で、血縁者とその配偶者を含む。その範囲は必ずしも明確ではないが、バンティムルンでは第4イトコまでを *bija pammanakang* (あるいは *bija mbani*) といい、第5イトコ以上の遠い縁者を *bija bella* とする。

第3あるいは第4イトコといった同世代の拡がりに対応する尊属親は必ずしも系図がたどれるというわけではなく、実際には第2イトコでさえも共通の曽祖父母がわからない場合が多い。親族名称にしても曽祖父 (*boe*) までしか常用されない。

V-1-ii 相続は慣習法により、男子2に対し女子1の割合で行われ、同性の間では均等に配分される。⁴⁴⁾ 財産の種類に関係なく、借

金をも含めたすべての遺産が分配の対象となる。両親とも死亡すると、3日、7日、40日の葬儀の費用 (*tawa attumateang*) および負債を清算して残った財産を初めて分配できる。もちろん、遺言によって財産をわけたり、生前に譲渡してしまったりすることは認められている。⁴⁵⁾

V-2 伝統的身分制度は血統、出自の観念に支えられているので、親族組織と密接に結びついている (cf. Errington [1977])。身分制度はオランダ政府がその植民地支配のために温存、強化したが、インドネシア共和国の成立とともに公式には廃止された。身分差が実質的に大きく崩壊したのは、反乱軍がそれを意図したかどうかは別として、1950年代から60年代にかけての内乱による混乱期であるといわれる。しかし、近村で最近あげられた結婚式において、招待者の身分差によって三つの区分した席を設けたというような例もある。⁴⁶⁾ 結婚すると個人名のあとにダエン称をつける習慣も貴族の子孫には残っている。このダエン称をもっている者に対して、個人名ではなくダエン称で呼ぶ習慣は確として残っている。郡長、村長に対しては出自の如何を問わずプアン (*puang*) またはカラエンと呼称する。

身分はカラエンからの血の濃い薄いによって決まった。カラエンの子同士から生まれた子は *ana' karaeng* で、最も高い地位をしめる。カラエンの息子と普通人の娘とから生まれた子は *ana' cera'* といい、カラエンの娘と

41) この問題および親族組織の分析は別稿を期したい。なお Maeda [1978] 参照。

42) ゴワ地方では夫婦と子供とを *sianakkang* と呼ぶという報告 [Abdul Rahim Mone *et al.* 1978: 12] がある。

43) Cense [1979] によると *kalabini* とは対 (*paar*) を指す。マレー語の *kelamin* にあたると思われる。

44) この相続法はイスラーム法から出たものではなく伝統的なものである。比喻として、女は頭上に物をのせて運ぶので、一つしか運べないが、男は天秤棒で両端に物を掛け肩で担うのでふたつ運べるように、男女の取り分は2対1となるという。水田が分配するのには小さすぎる時は売却せずに、遺産相続者の間で1年交代で耕作 (*taunge*) が行われることもある。

45) 死亡前に譲渡した土地を *pa'sai* と呼ぶ。

46) 婚資の額、儀式用具に至るまで婚姻儀礼そのものが身分差の表現であるが、この儀礼はまだ比較的守られている。婚姻相手との身分的釣合いを重んじるために婚期の遅れる女性が目立つ。もちろん、反対にダエン称 (*pa'daengan*) も使わず身分にこだわらない人も多い。このような人は、カラエンの存在は平等を説くコーランの教えと両立しないという。

普通人の息子との間の子 *ana' sibali* より身分が上である。要するに、身分の下の方との婚姻は、その子供の地位を両親の中間に位置づけることになる。従って、自分の身分を同定するために、血統ないしは系図 (*kajariang*) が重要となってくる。⁴⁷⁾ カラエンと血縁関係にない層は, *tau baji*, *tau samara*, *tau biasa* と呼ばれ一般大衆である。支配層であるカラエン, プアンの家族以外のダエン称をもつ貴族は, 一般大衆とカラエンの間の中間層であるともいえる。一般大衆の下に *ata* と呼ばれる下人層がいたというのが, 詳らかではない。⁴⁸⁾

オランダ時代にはカラエン・バンティムルンはパンカジェネの *controleur* に認められてから即位式を行い, カラエン・エレタッラサなどの行政職ではない伝統的カラエンはカラエン・バンティムルンによって認証されたという。⁴⁹⁾ 戦後から1954年まで, 村長としてのカラエンの下にピランヌ (*pirannu*) という助役が8人いた。⁵⁰⁾ このピランヌがピナティを兼ねていた。カラエン自身は最高位のピナティでもあると考えられている。

- 47) バロッチの昔のカラエンは系図を常に手元に置いておき, 出生が明らかでない客はまずその系図に基づいて同定してから, 椅子に腰掛けさせるか床に座らせるかを決めた。なお, ブギス・マカッサル文化圏では, 女性は身分の下の方と婚姻できないという規則 (*hypergamy*) があるのがふつうであるが, 本村では *ana' sibali* のカテゴリーが認められているように, 禁止されていない。ただし, *ana' cera'* はカラエンの血を75%ひくが, *ana' sibali* は25%であるという。
- 48) 現在でも昔の主人筋にあたる人に *attanna* (あなたの下人) と自称する年寄りもいるが, 極めて稀である。この付近では1933年ごろに *ata* 制は廃止されたというのが, それより以前にオランダは奴隷制廃止を施行している。
- 49) ただし, カラエン・エレタッラサの即位式にはカラエン・バンティムルンはその選任の段階から何ら関与しない。
- 50) 現在の RT 長に相当する。

V-3 現在のバンティムルンのリーダーシップはフォーマルには, マラカ出身の村長と彼の下の方の村役人とが握っている。村長の下には村の行政を行う村役人以外に, RK 長, その下には RT 長が決められているが, 実質的なリーダーシップをもっているとはみえない。伝統的身分階層では, カラエン・エレタッラサのグループと, オランダから最後に任命されたカラエン・バンティムルンの姪の婿のグループと, その先代のカラエン・バンティムルン (兄) の息子のグループとの三つがある。後二者はいずれも村長ないしはカムポン長経験者である。これら伝統的貴族層も, 教育を受けていなかったり, 相続問題で村人の評判を落としたりして, その影響力は小さい。むしろ, 教育を比較的受けた旧イマム・グループ⁵¹⁾ が教員あるいは村役人として強い影響力をもつ。

V-4-i カラエンには非常に権威があって, その命令には必ず服従しなければならなかった, というのが村人の昔のカラエン像である。カラエンは聖器を継承し, それがカラエンの正統性を証明する。例えば, カラエン・エレタッラサの子孫はロンタラ・マヌルン (*Lontara Manurung*),⁵²⁾ ラップンナ (*Lappunna*) エレタッラサ (槍), アラビラン (*Ala-bilang*) エレタッサラ (白い布に包まれた大小2個の石) をまだ保管している。⁵³⁾ パッサ

- 51) 戦前パンカジェネからイスラームに詳しい人を招来してイマムとした。その人の孫の代にあたる人々である [前田 1981]。カラエン, ピランヌが政治的には村長, RT 長にかわったように, 宗教的にもカラエン, ピナティがイマム, グル (*guru*) にとってかわられる。
- 52) 農業法のようなもので, 毎年1回, 田植え祭の時に開いて読む (*mattoro*)。内容はブギス族に一般的な三毛猫譚 (*meompalo karallae*)。
- 53) 聖器の多くは, オランダ人によってもちさられたか, 戦争で焼失したか, 行方不明になったかして完全な形でみることは難しい。

ラサッカ (passalasakkang)⁵⁴⁾ はエレタッラサの泉の近くにある手形を押したような石である。

カラエンは村人を動員する力があって、多くの水田を開拓し、それを子孫や功のあったものに分配した。オランダ政府が20世紀前半に土地測量を行なった時に、カラエンの所有していた水田の一部を、税を払う必要のない職田 (sawah hoofd)⁵⁵⁾ として登記し、これが独立後の共和国に受け継がれ、職田はそのまま政府の土地として編入された。⁵⁶⁾ このため、カラエン、ピナティの子孫の中には土地なしになってしまった者も出たという。

バンティマラでは、このような職田 (sawah jabatan) は1976年まで 8 ha あったが、その年従軍などで功績のあった者に分譲され、現在は政府の土地として 2 ha しか残っていない。小作人 (RT 長) が耕作して、小作料は郡・村役場の歳入になる。

V-4-ii カラエンの水田、とくに職田にはカラエンの指定する日に人々が集まって、農作業をカラエンのためにする慣習であった。一般の共同作業が makkio' と呼ばれるのに対し、カラエンのためのは tamba' といわれた。とくに田植え (assuro tanang) 開始の行事には村人は必ず参加していた。しかし、上

述のように、バンティムルのカラエンの職田が当時のカラエンに私有田として政府から与えられた時、⁵⁷⁾ とその最後のカラエンが死去した時 (1978年) とを境にして村民はだんだん来なくなり、現在ではふつうの makkio' によって行われている。

V-4-iii 戦前まで、水田所有者は農業労働者 (耕作者)、田植え女、牧童を食事つきで養って、労働力を確保していた。報酬としては、収穫時に耕作者には40束、田植え女には30束、牧童には20束を与えれば済んだ。例えば、1965年に焼けたカラエン・バンティムルの家には、家事・炊事をしたり、畑や道具の管理をする男女おのおの3人ずつ (必ずしも同居しない)、牧童4人、水稻耕作者3人がカラエンの家族のほかにはいたという。R.N. 氏宅では、現在でも toribola (字義通りには家人の意) として女2人が同居しており、耕作者としてP氏が定期的の手伝っている。小学校5年生の男の子は牛と水牛 (成牛6頭、子牛4頭) の世話をし、中学校2年と3年の男の子ふたりは耕起、除草をする。田植え時にはトンドン (Tondong) で学校の先生をしている娘夫婦が帰ってきて手伝う。これに、時々帰る高校と大学に行っているふたりの息子が加わっても、農繁期には共同作業ないし賃労働を頼まねばならない。

V-4-iv 共同作業を指す makkio' という語は (人を) 呼ぶという意味である。Makkio' をする前日に使いの者 (pasuru') が各戸の家に行き、椅子には座らず、床の上に座って主人に頼む。⁵⁸⁾ これは水田耕作者同士で行われ、makkio' に来てくれた人のところには、makkio' されると助けに行く義務がある。集まる人数は数人から20人ぐらいであるが、何人

54) とくにカラエンなどに関係のある、大きな saukang (祠) あるいは「(村人を) 守ってくれる家」という意味であるという。語根 salassa' には、砦柵、宮殿の意がある [Cense 1979]。エレタッラサの石がパッサラサッカと呼ばれるのは、この石のあるところがカラエン・エレタッラサの居所と関係がある故か。

55) Galung ornament, tana' pangnganreang ともいわれる。無税にされるというので、カラエンたちは最もよい水田を指定したという。

56) バンティムルのロムボッダムパン (0.34 ha) の場合は、1952年に職田として改めてカラエンに貸与されたのち、1968年に長期間政府につくした功績により授与されたので、その後は私有地となる。従って、そのカラエンの子孫のみに権利が生じ、本来潜在的権利のあったほかのカラエンの子孫には相続権がなくなった。

57) 1968年まではカラエンの娘婿が村長を務めていた。

58) 等価的な労働力交換慣行であるから、水田の所在地、面積などの要因が、親族関係、交友関係以外に考慮される。

来てくれるかは当日になるまでわからぬようである。主催者は助けに来てくれた人に食事とタバコを供する。呼ばれた人は農具（犁一式）と牛（水牛）とを持参する。⁵⁹⁾ Makkio' を1作期に何回するか、どのくらいの人数を呼ぶか、というのは主催者の社会的地位、社交性にも左右される。

V-4-v Makkio' に対して、労働力だけを提供してもらって報酬を与えるシステムを angngalle allo という。自分の水田を所有しない人を対象に田植えを手伝ってもらう。⁶⁰⁾ 彼らは午前と午後まる1日働いて、その間の昼食と稲1バッセ(束)とを得る。寡婦などに対する一種の社会福祉と考える人もいるが、農繁期にはこの種の労働者を得ることも難しい場合がある。

この angngalle allo を田植えの時にした人は、その田の収穫時に優先的に収穫に参加する権利をもつ。その報酬は仕事の量にかかわらず1日1束と決まっている。ほかの人が収穫だけに参加した時は、5束の収穫に対し1束の報酬を得る。南スラウェシでは慣習として収穫時に誰でも参加でき、報酬の割合がよいので、村内だけでなく他村からの参加者もあるのがふつうである。しかし、本村では他所から収穫作業に来る人はいないし、また他所に出ていく人もない。その一つの理由として村人があげるのが、この angngalle allo の収穫優先権であるという。

V-4-vi 小作の場合はふつう、収穫が土地

所有者と小作者との間で折半される。ただし、小作には収穫費用は含まれていない。一部の水田および水田裏作については所有者1, 耕作者2の割合もあり得る。インタビューによれば、17戸が貸し付け (papitesang-ngang) ており、そのうち11戸は同じ集落の者に貸している。小作している (attasang) と報告した数は18ケースある。小作の年数は1~3年がほとんどで、4~6年が3ケース、14年が1ケースである。小作のみに頼る農家は、IV-2-ii であげた、水田を所有していない4世帯のうち1世帯にすぎない。ただし、抵当としてもっている水田は使っている。

V-4-vii 水田の譲渡方法は、相続以外には、売却 (balu' laburu'), 抵当 (balu' ta'gala'), 小作 (balu' paja') と区別される。⁶¹⁾ 小作は1年ごとの売渡しとも説明されるように、契約はないことが多いが、いつでも所有者は返却を要求し得る。抵当は、葬儀、結婚式、家の建築などに必要な費用ないしは牛・水牛の肉を得るために、水田1筆につき牛2, 3頭の割合で行われる。金額あるいは黄金量でも記憶される。もちろん所有者は抵当に相当する額を返済することによって権利を回復する。

水田を購入したことのある世帯数が10(約13%), 売却したことのある世帯数がわずかに1 (1.3%) という数字に対し、抵当で得たもの (panna'gallang) は28世帯 (36.4%), 抵当として失ったもの (pappita'gallang) は13世帯 (16.9%) である。

V-5 稲魂 (Sangiangserri) をめぐる稲作儀礼は、断食あけのレバラン、結婚式、葬儀な

59) 苗代作りを手伝う場合は、手伝う人がその苗代田の一部を使用させてもらう。

60) この地方では田植えは女の仕事である。防柵作りという重労働が男に課せられているので、女性が田植えを受けもつ。実際には男も加わっている風景が多かった。収穫も女中心ではあるが男女とも参加する。なお、海岸部では原則として女性が農作業をしてはいけないことになっており、田植えも男の仕事である。ボネ・ブギス人も同様である。マカッサル地方では女性の田植えが多い。

61) 水田の方からみれば、自分が耕作するか、その責任をもっている水田は parakkang または jamang; 小作として耕作している水田は galung nijuru または galung nitesang; 抵当で耕作している田は galung nita'gala'; 自分の所有水田は galung pusaka; 相続田は galung ma'nara と名づけられる。

どとならんで、農作業のけじめをつけ、豊作を願うための重要な儀礼である。南スラウェシー一般に関しては Abu Hamid *et al.* [1980], ブギス族に関しては Pelras [1974], トラジャ族に関しては Hidayat [1976] などが最近の報告としてあるが、地域差をふまえた儀礼体系の分布ないしは分類をする作業はまだ行われていない。本節では、その作業のための一事例として、稲作労働に付随する儀礼を解釈なしで概説する。その情報のほとんどは聞き取りによるもので、今後実地の観察に基づいた報告と分析とが望まれる。

稲作の作業開始はインドネシア語で *turun sawah* (水田におりる) と呼ばれて、マレー世界全般にわたって何らかの行事があった。その日を決める方法も、太陽や星宿の測定によったり、独特の暦表を用いたり、決定者が農耕のための祭司であったり、一般的な祭司であったり、首長であったりすることは周知の事実である。いずれにしても、この行事が終らなければそのコミュニティの人は農作業を開始できない。バンティムルンでは *assuro rigalung* と呼ばれ、昔はカラエンの特定の祭田へ、槍、まぐわ、織物などの宝器の行列がなされ、同時にソンコロッ (*songkolo'*, 糯米を蒸して円錐状に盛ったもの) を用意して神に供え、共食した。現在では前者 (これは現在でもラバッカ、ブンゴロなど海岸部で行われている *appalili'* に相当する) は行われないが、後者は適宜各家ごとに行われる。⁶²⁾

苗代は鍬で整地をする (*appakaramula*) が、使われた鍬は使用後3日間家の中の水入れの近くにしまう。稲穂をゴザの上でふんで種籾を取る作業は男がする。流水に2日2晩つけ

たのち、2~3晩家の中にしまっておかれる。この時期は籾の芽が出る重要な時期なので、1対の魚、ククイナット (*Aleurites moluccana*) のローソク、バナナ葉、熟した椰子の実、ゴザなどととも、菓子、オンド・オンド (*onde onde*) 40個、バジェ (*baje*) 7個、パダリサ (*padalisa*) 40個を籾をしまった入れ物の上にならべる。一般にマカッサル族にはなじみが薄いといわれる三毛猫譚を読む習慣がある。

種籾の入れ物を開く時には、2個のターメリック (*Curcuma domestica*) (*anrong kunyi'*)、クワイノキの実 (*sapiri*)、たいまつ (*sulobakkang*)、あひるの卵の殻などを用意して、*anrong tamu* を行う。種籾は男が入口から担いで出る。出る際に戸口の中から妻女が「140日後に立派な姿で帰ってこい」といいながら、担がれていく種籾に実の入っていない籾殻を3回投げつける。

苗代に着くと、苗代の右の隅に種籾を置き、まず短刀 (*badi*) を苗代のまん中に突き立てる (*nibaja'*)。その傍らにマリマリ (*malimali*, *Leea aequata*) の枝と竹の一種 (*bulobanna*) の枝を立てる。種籾をそのぐりに三重に播く。短刀を抜いて畦に帰り、そこから田の中に入らずに播種を行う。

耕起に使う水牛・牛は仕事を始める前に、ビンタッラサ (*bintallasa*, 草の名) あるいはリア (*rea*, *Imperata cylindrica*) の葉を首に巻きつける。

田植えは、高谷 [1982] に報告されているように、カラエンの祭田 (*galung lombo karaeng*)⁶³⁾ での田植え行事 (上述 V-4-ii 参照) が行われねば一般の人は始められない。ただし、耕起はそれまでに行なってもよく、耕起

62) ゴワなどマカッサル地域では高谷 [1982] の報告する始耕祭 (*appalili'*) が卓越している。ブギス族では *tudang sipulung* (*asitudeng tendangeng*) といわれる農作業の日取り決定の会議があってから *mappalili'* が行われる [Abu Hamid *et al.* 1980: 160]。

63) ただし、総称ではなく固有名詞がふつう使われる (*Lompo' Tamasikapa*, *Lompo' Pa'pinatiang* など)。祭田と職田との混同により、独立後、昔祭田であったところが人手に渡った場合は、祭田が改めて別のところに移される。

の終わった田にはバンジロウ (*Psidium guajava*) の枝葉を田のまん中に立てておく。

バンティムルンの祭田 (ロムポッダムパンの一部) では、昔はリタ (rita, *Alstonia scholaris*) の木の下で水牛を屠り盛大に行われたが、最近では必要な行事は家で済ましてしまい、水田の傍らでソンコロッを食べることも止めている。パンガとマニャムパでは、ゴワの土 (tana Gowa) と呼ばれる直径 2m、高さ 60cm ぐらいの円い盛り土が祭田の中の端あるいは畦にある。ここでピナティ (元のカラエンの子孫) がソンコロッ (黄、赤、黒の3色) を供えて香を焚いて祈りをとえ (suro baca), 共食する (attoanna kalompong)。マニャムパではこの土の上に米粒も供える。盛り土の上に穂先のある竹 (bulu karesa) を突きさし、その上にアレンヤシの若葉で作った吹き流しをつける。水田の中にも竹とマリマリとを立てる。

一般人が田植えを始める時には、自分の田にまじないをして豊作を願う。田のまん中、田の中にある岩の陰、田の隅など、その位置も人様々であるが、飾り方も一定していない。稲株を七つ植え、竹の若枝を立て、割竹で囲い、外にバンジロウの枝を立てているのは比較的完全な形である。その外にマリマリ、カタンカ (katangka, *Millingtonia hortensis*), バランバラン (balangbalang, *Pontederia vaginalis*), パレムパサッ (parempasa', *Rauwolfia amsoniifolia*), アレンヤシの葉などが立っているのもみかける。

田植えの終り (patingalla' tanang) にはオンデ・オンデ、バジェなどの菓子を食べる。仕事の終わった牛、水牛、犁、まぐわも patingalla' をする。牛・水牛は耕作始めと同じ葉を首に巻いて無事息災を祈る。

害虫防ぎの伝統的な方法は、ラッラ (ra'la) と呼ばれる灌木の葉をエムブン (embung, 菓草の一種) の葉と一緒に田の周囲を回

り、その後それを畦で焼く。害獣(猪)を防ぐには、小便にひたした布切れで垣をするとよいといわれる。豊作・不作を占う一つの方法として、エレタッラサ泉の水口にある水牛石の動きをみるということが信じられている。⁶⁴⁾

収穫祭は昔は村をあげての盛大な行事であったが、現在は個人的に行われている。大勢の人がならんでする臼つき (appadekko), 踊り (pakarena),⁶⁵⁾ 太鼓 (paganrang) 叩きなどが昔はあったという。収穫が本格的に始まる前日に、各筆から1~3本の稲穂を取り (lahulung), 家にもち帰ってつき、種蒔きの終わった時にもち帰った薪木で炊いて食べる。この稲を ulu ase と呼ぶ。しかし、ブギス地方でみられるように、畦のそばの稲穂を摘み取って種粃としたり、特別のピナティが男性穂を取り、次に女性穂を取るといった行事はここではない。

VI お わ り に

VI-1 集落には、猫、犬、にわとり、あひる、牛・水牛がこの順で人間に近く住んでいる。⁶⁶⁾ とくに猫は三毛猫譚にみられるように稲とも深い関係があり、大切に扱われる。牛・水牛は夜は台所の下につながれ、昼は水田で仕事をするか、集落の外の放牧用地につれていかれる。水田にはネズミ、蛇が棲んでいる。猿・猪もそこに出没するが、彼らの棲みかは野牛、鹿、大蛇などととも森林の中である。

村の中心には大木 (kajuara) がある。集落

64) この水牛石の子供石が近くの水流にあり、これも神聖視されている。

65) Holt [1939: 21] はパンカジェネ地方で、田植え収穫の祭りに行われる pakarena bura'ne' という踊りを報告している。

66) ヤギは、ニシキヘビ、犬が多いこと、人が好まないことで飼われない。馬は、昔は交通手段として重要であったが、雨に弱く、現在ではバンティムルンにいなくなった。

内の屋敷畑にはココヤシ,⁶⁷⁾ バナナ, 果樹, 野菜, トウガラシなどがみられる。水田は時代がたてばたつほど, 元の植生は消滅してしまって, その代替物は稲と雑草しかみられない。畑にはトウモロコシ, キャッサバ, バナナ, ココヤシのほかにアレンヤシ, 竹, チークが垣の中にみられる。その向こうには, フタバガキ科などの樹木, 森林がある。

生産の場としての土地のカテゴリーには, まず屋敷畑 (parallakkang) が家の前にある。集落の近くには水田 (galung) がある。水田には集落から離れた平坦地 (parang) にあることもある。常畑 (kubung) が次に現われる。いわゆる焼畑を含む広義の畑は koko であり, その中で繰り返し使われるところが tattakkang と呼ばれ, それが kubung または galung に転化していく。Koko の外側は森林 (rombong) で, 栽培の世界ではなく採集・狩猟の世界である。

このような, いわばどこにでもみられる同心円的生活環境の認識を書きつらねたのは, 自然環境を書きかえて, 改めて生活環境を人間が作り出していることを確認するためである。この中での住空間は次のようになっている。

家のシンボリズム⁶⁸⁾ は家の中心 (posi bola) に凝集する。この柱の下には, くさび, 飯, ビンロウ一式 (kalomping)⁶⁹⁾ を埋める。柱には, 短刀, 四角い布, 束髪, 白粉が常に置かれる。集落の中心 (posi butta) はパッサラサッカ (passalasakkang) にあり, 祠 (sau-

kang) は大木 (kajuara) の側にあることが多い。サウカンあるいは頼みごとを願うパンガダッカ (pangngadakkang) は霊験あらたかと信じられるところに次々と求められる。パッサラサッカはそれを祀る人や集落が移動しても, その効力をもつ。聖地に対応する聖器は首長となるべき人々に代々受け継がれていく。聖器は arajang, kalompoang という。⁷⁰⁾ カラエン・エレタツラサの場合は上述したが, カラエン・バンティムルンのは旗の裂地であるという。そのような聖性を帯びたものとして, 祭田が今度はすべての水田の象徴的中心となる。

昔の集落には, 一つの bija あるいは pam-manakkang と呼ばれる親族範囲の人が一つの大きい家に住み, その大きな家が集落の中心となっていた。現在はその親族範囲の人は, 夫婦を中心とする小家族ごとに1軒の家に住んでいるが, 集落に住居を構えるのは, 中心となる親族範囲の中から出た人が主体となる。その中でもマージナルな人は畑の出小屋に住む。いわば核である水田と密集集落と, 周縁にあたる畑と散開集落との分極が, 親族関係と関連しながら存在している。

VI-2 伝統的コミュニティにおける組織原理は血統と聖性であった。血統と聖性とを結びつけるものは, 集落の形成以来受け継がれているという継続性である。その具体的象徴が水田である。とくに貴族の結婚では水田が最も貴ばれる贈物である。その昔, エレタツラサの王女とシアンの王子との結婚の時に, シアンの地にある104筆の水田 (galung pa'kat-tunang) が王女に与えられたというような, 首長間の水田の授受の話は好まれて語られる。婚姻の際の慣習として, 婿が嫁のところ

67) 死者の汚いところを洗った者に, 死者の植えたココヤシの木1本が贈られる。従って, 人は必ずココヤシを植えて死後に備える。屋敷畑にはアレンヤシ, マンゴ, クワイノキ, ワタ, コーヒー, キャシュナット, パンノキ, キャッサバなどを植えているところもある。

68) 例えば, 佐久間 [1980], Pelras [1975], Abu Hamid [1981] など参照。

69) シレの葉, ピナンの実, 石灰, タバコ, ガンピールからなる。

70) なお, kalompoang はカラエンの家に限らず, 貴族の家にもある。衣地, クリス, 枕など種々ある。家の中につるしておいて, 1年に1度収穫前におろして, その前でお祈りを捧げる。

にもっていく水田を panyombu といい、1筆40束以上の収穫があるところでなければならないという。⁷¹⁾

現在では血統は役職、免状にとってかわられたが、継続性の象徴としての水田は不変である。むしろ、相続による水田の細分化、身分廃止による生活の平準化、教育・生活必需品購入のための現金収入の必要性は、必然的に水田の拡張へと向かわせる。しかし、調査対象集落では、経済的に余裕のあった層が教育を受けて定収のある教職などにつくことが多かったのも、水田拡張はむしろ周辺的なメンバーによってしか現在行われていない。この意味で、バンティムルンに関する限り、現金収入がある程度確保できることと、機械導入の難しい地理的条件での労働力不足ということと、ほとんどの世帯が水田を占有しているということから、現在ぐらいの水田面積で十分人口維持が可能であるとの、いわばクライマックスの見方を村人はしているともいえる。

引用文献

- Abdul Rahim Mone; Rachmah; and Aminah P. Hamzah. 1978. *Adat dan Upacara Perkawinan Sulawesi Selatan*. Ujung Pandang: Proyek Penelitian dan Pencatatan Kebudayaan Daerah.
- Abdul Razak Daeng Patunru. 1967. *Sedjarah Gowa*. Makassar: Jajasan Kebudayaan Sulawesi Selatan dan Tenggara.
- Abu Hamid. 1981. *Pola Pemukiman Daerah Sulawesi Selatan*. Ujung Pandang: Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.
- Abu Hamid; and M. Johan, Nyompa. 1980. *Aspek Geografi Budaya dalam Wilayah Pembangunan Daerah Sulawesi Selatan*. Ujung Pandang: Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.

71) この田からの収穫を婿の実家のとまぜると病気(kacarra)になる。

- Cense, A. A. 1979. *Makassaars-Nederlands Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Chabot, H. Th. 1950. *Verwantschap, Stand en Sexe in Zuid-Celebes*. Groningen: J. B. Wolters'. (English translation by Richard Neuse in the Human Relations Area Files)
- . 1967. Bontoramba: A Village of Goa, South Sulawesi. In *Villages in Indonesia*, edited by Koentjaraningrat, pp. 189-209. Ithaca: Cornell University Press.
- Errington, Shelly. 1977. Siri, Darah dan Kekuasaan Politik di dalam Kerajaan Luwu Zaman Dulu. *Bingkisan Budaya Sulawesi Selatan* I(2): 40-62.
- Hapid Adaus, A. 1979. Sejempit Fragmen Historis Kab. Pangkep. Pangkajene. (Mimeographed)
- Hasan Walinono. 1979. Tanete: Suatu Studi Sosiologi Politik. Ph. D. Thesis, Universitas Hasanuddin.
- Hidayat Kandaatmaja. 1976. *Pertanian Toraja*. Ujung Pandang: Laporan Penelitian Pusat Latihan Penelitian Ilmu-ilmu Sosial.
- Holt, Claire. 1939. *Dance Quest in Celebes*. Paris: Les Archives Internationales de la Danse.
- Kantor Sensus. 1979. *Sulawesi Selatan dalam Angka Tahun 1978*. Ujung Pandang: Kantor Sensus dan Statistik Propinsi Sulawesi Selatan.
- 前田成文. 1973. 「双系的親族組織におけるイトコ婚の一考察」『東南アジア研究』10:478-502.
- Maeda, Narifumi. 1978. The Malay Family as a Social Circle. *Tonan Ajia Kenkyu* [South East Asian Studies] 16: 216-248.
- 前田成文. 1981. 「農民と宗教—南スラウェシ調査雑記—」『国際農林業協力』4(1): 53-60.
- Mangarandang Sianipar. 1978. *Sa'bi dan Rinci' versus Sertifikat*. Ujung Pandang: Laporan Penelitian Pusat Latihan Penelitian Ilmu-ilmu Sosial.
- Masiga, A. M. Dg. et al. 1974. *Pangkep Membangun*. Pangkajene: Kabupaten Pangkep.
- Mattulada, ed. 1976. *Bahasa Bugis di Sulawesi Selatan*. Ujung Pandang: Proyek Penelitian Bahasa dan Sastra.
- . 1982. South Sulawesi, Its Ethnicity and Way of Life. *Tonan Ajia Kenkyu* [South-east Asian Studies] 20: 4-22.
- Mills, R. F. 1975. The Reconstruction of Proto-South-Sulawesi. *Archipel* 10: 205-224.
- Mundy, Rodney. 1848. *Narrative of Events in*

- Borneo and Celebes, Down to the Occupation of Labuan: From the Journals of James Brooke, Esq.* Vol. 1. London: John Murray.
- Noorduyn, J. 1965. Origins of South Celebes Historical Writing. In *An Introduction to Indonesian Historiography*, edited by Soedjatmoko *et al.*, pp. 137-155. Ithaca: Cornell University Press.
- Pelras, Christian. 1974. «Herbe Divine» Le Riz chez les Bugis (Indonésie). *Étude Rurales* 53-54-55-56 (janv.-dec.): 357-374.
- . 1975. La Maison Bugis: Formes, Structure et Fonctions. *ASEMI* 2: 61-100.
- . 1978. Nouveaux Développements de la Recherche Indonesianiste: L'Exemple de Celebes-Sud. *ASEMI* 9: 109-134.
- Rachmah *et al.* 1976. *Peristiwa Tahun-tahun Bersejarah di Sulawesi Selatan dari Abad Ke-XIV s/d Abad Ke-XIX*. Ujung Pandang: Lembaga Sejarah dan Antropologi.
- 佐久間 徹. 1980. 「マカッサル族における家屋のシンボリズム」『南方文化』7:31-45.
- Samin Radjik Nur *et al.* n.d. *Kedudukan dan Fungsi Tanah dalam Persekutuan Hidup Masyarakat Sulawesi Selatan*. Ujung Pandang: Universitas Hasanuddin.
- Sutherland, H. A. 1980. Political Structure and Colonial Control in South Sulawesi. In *Man, Meaning and History*, edited by R. Schefold *et al.*, pp. 230-245. The Hague: Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde.
- 高谷好一. 1982. 「パンカジェネ河流域の土地利用」『東南アジア研究』20: 94-113.
- Zainal Abidin Farid, Andi. 1971. Notes on the Lontara' as Historical Sources. *Indonesia* 12: 159-172.